

小学校教員1年生の意識調査

—学生時代の調査との比較を中心として—

Questionnaire to Freshman Teachers of Elementary School —Comparing to the Survey at Student Age—

麓 信義*・小山 秀哉*

Nobuyoshi Fumoto & Shuya Oyama

(1984. 7. 18受理)

筆者らは、小学校教員養成課程(小学校課程)の学生について、実技教科(音楽・図工・体育)を中心とした意識調査を行い、実技をとまなう教科の重要性の認識が上級生ほど高まっていたことを報告した⁽¹⁾。しかし、それは横断的調査であったので、今回は、3年生の時に調査した学生が就職した機会に、縦断的調査を行った。現在、臨時教育審議会が設置され教育改革が押し進められようとしており、教員免許基準の引き上げも検討されている。そこで、幅広く大学での教員養成に関する意見をも聴取したので、併せて報告する。

方法

調査対象 調査対象は、昭和58年3月の本学教育学部卒業生で、4月より小学校に勤務(非常勤も含む)した学生で、現住所の判明している者、男子38名、女子49名である。回収率は男子66%(25名)、女子65%(32名)であり、その中で、3年生の時に調査を受けた者は、男子15名、女子26名であった。

調査項目 質問紙では、前回、3年生のときに調査した実技3教科必修に対する意見、小学校で教える8教科の重要度、教え易さ、好みの程度に加え、大学での授業が役立ったかどうか等についても調査した。さらに、実技3教科については、それぞれの教科の実技科目が役立ったかについても回答させた。また、教員免許基準の引き上げについては、問題となる改正点について、それが教員資質の向上につながると思うかどうか、意見の賛否を5段階評価でたずねた。詳しい調査項目は結果と考察のところで述べる。

調査方法 質問紙は、各卒業生が配属されている小学校に直接郵送し、大学あてに返送させた。外部に名前を出さないことを条件に記名回答させ、3年生の時の回答からの変化を把握できるようにした。

結果と考察

1. 回答者のプロフィール

回答者の70%は、青森県の小学校に就職している。また、担当学年は、表1に示すように、3年生がもっとも多く、男子は、3,4年生に集中しており、女子は、2,3年生が多い傾向にあった。そして、学年担任をしていない者は1名にすぎなかった。今回、再度、最終的に教員になる決心をしたのはいつかとたずねたところ、大学入学前と答えた者が男子で73%、女子で62%ともっとも多く、3年次教育実習後までにはほとんどの者が教職に就くことを決意している。教職に就いてよかったか、という質問に「いいえ」と答えた者はなかった。ただし、「どちらとも言えない」という答えも約三分の一ほどあった。

2. 大学3年生の時の意識との比較

前回と全く同じ質問項目のうち実技3教科の必修の是非について、回答者全体でみると(表2)、3年生の時に比べ、男子では、不得意な教科のある学生もいるので2教科でよい、とする意見が減り3教科必修に賛成する意見が増えている。女子については、もともと、実技3教科必修の賛成者が多かったが、不得意な

* 弘前大学教育学部保健体育科教室

表1 担任している学年の分布（単位：人）

性別	学年	1	2	3	4	5	6	特 別	な し
	男 子		0	3	9	7	3	2	0
女 子注		3	8	10	5	3	0	2	0

注：他に4年と5年という回答が1名ある

表2 実技3教科必修に関する回答分布（単位：%）

回 答	男 子		女 子	
	前 回	今 回	前 回	今 回
3 教 科	26	44	58	72
実 質 3 教 科注	34	44	20	28
2 教 科	40	12	22	0

注：実質的にはほとんどの学生が3教科とも履修するので必修は2教科でよい、とする回答

教科のある学生もいるので2教科でよいとする意見は全くなくなりました。男女とも、ほぼ100%が理想的には3教科必修に賛成の意見であると解釈することができる。しかし、調査対象者のほとんどが、専科教員のいないへき地の小規模校に赴任しており、実技教科の専科制の導入の是非もあわせて質問すれば、やや異なった回答が得られたかも知れない。いずれにしても、実技教科の重要性の認識は1年次よりも3年次、3年次よりも教員になってからのほうが高まっていると考えてよいであろう。

次に、2回の調査結果のそろっている者を対象に8教科の意識を5段階評価でみると(表3)、重要度では、

表3 各教科の重要度、好み、教え易さ（5段階評価の平均値と教科間順位）

質問項目	性	国 語	算 数	理 科	社 会	家 庭	音 楽	図画工作	体 育	備 考
教科としての重要性	男	1.13(1) 1.33(2)	1.20(2) 1.20(1)	1.60(3) 2.07(6)	1.60(3) 1.93(5)	2.66(8) 2.33(8)	2.20(6) 1.60(4)	2.47(7) 2.13(7)	1.60(3) 1.53(3)	1…重要 3…普通
	女	1.12(1) 1.12(1)	1.15(2) 1.12(1)	1.46(5) 1.96(5)	1.35(3) 1.96(5)	1.85(8) 2.05(8)	1.58(6) 1.81(4)	1.73(7) 2.00(7)	1.35(3) 1.46(3)	5…あまり重要でない
好 み	男	2.60(5) 2.33(5)	1.60(2) 1.93(2)	2.07(3) 2.07(3)	2.47(4) 2.20(4)	3.07(7) 2.73(7)	3.20(8) 2.73(7)	2.67(6) 2.60(6)	1.40(1) 1.73(1)	1…好き 3…普通 5…嫌い
	女	1.92(1) 1.96(1)	2.46(5) 2.04(2)	1.96(2) 2.52(6)	2.46(5) 2.60(8)	2.38(4) 2.53(7)	2.35(3) 2.20(3)	2.85(8) 2.32(5)	2.77(7) 2.24(4)	
教え易さ	男	3.47(7) 3.27(8)	2.73(3) 2.47(2)	2.53(2) 2.93(6)	3.13(5) 2.93(6)	2.80(4) 2.80(5)	3.67(8) 2.73(4)	3.13(5) 2.67(3)	2.07(1) 2.13(1)	1…易しい 3…普通 5…難しい
	女	3.31(7) 3.00(7)	2.73(2) 2.42(2)	3.15(6) 2.65(6)	3.31(7) 2.62(4)	2.46(1) 2.07(1)	2.77(3) 2.42(2)	3.12(5) 3.04(8)	2.81(4) 2.64(5)	

注1：上段が3年生秋、下段が就職1年後（2月）の調査

注2：男子15名、女子26名（ただし、家庭の教え易さについては白紙回答が多く、男子5名、女子14名の回答数）

国語と算数が1番で次が体育、という傾向がみられ、前回同様であった。しかし、理科と社会の評価がやや下がり、国語・算数のグループとの差が大きくなった。

こうしてみると、上に述べた「実技教科の重要性の認識」は、教科として重要という意味の認識が深まったのではなく、教える時に大学の授業での体験が重要という認識が深まったととるべきではないかと思われる。

好みについてみると(表3), 卒業1年後になっても男子の順位はほとんど変化しなかったが, 女子では, 算数・図工・体育の順位が上がり, 理科・社会の順位が下がっている。しかし, 男子は体育を好み, 女子は国語を好むという傾向は変わらなかった。一方, 教え易さは, 全般的に平均値が低く(教え易く)になっているが, 男子の理科だけは, かなり高くなっている。教え易さの順位の変動をみると, 男子は理科を難しいとし, 音楽をかなり易しいと感じるようになり, 女子では, 相対的に図工を難しいと感じ, 社会を易しいと考えるようになっている。

各教科の各観点ごとの平均値の変化を, 前回同様, 図1に示したが, これをみると, 教え易さについては,

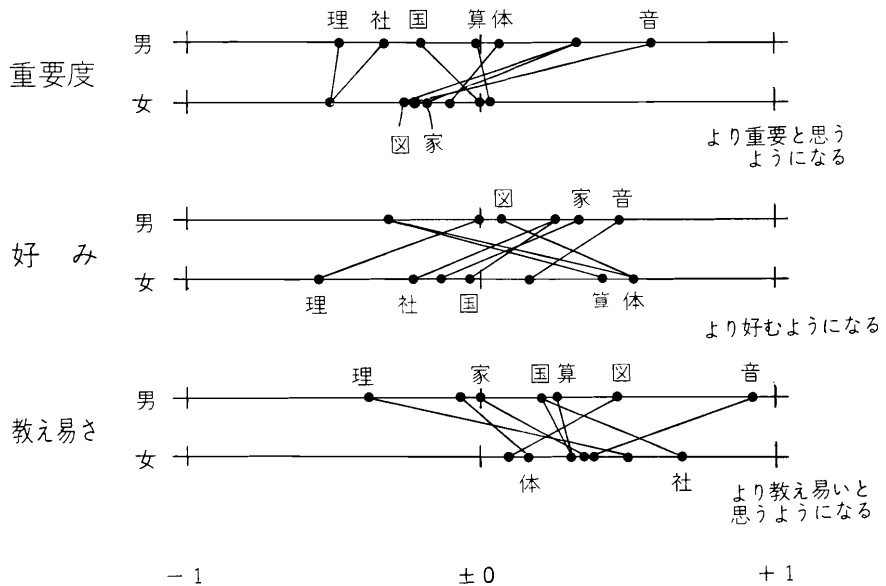


図1 各教科の重要度, 好み, 教え易さの大学3年生から教員1年生にかけての変化

全体的に教え易いと思うようになる傾向であったが, 重要度については教科によって異なり, 全体的傾向は見出せなかった。これは, 前回指摘した大学1年生から3年生へかけての変化(各教科の重要度については全体的に高く評価するようになるが, 教え易さについては, 教え易くなる教科も教えるにくくなる教科もある)と正反対であった。このことは, 学生時代の体験と, 教員になってからの体験で得るものが異なっていることを示していると思われる。教員養成に関して, 教育実習の位置づけが問題とされているが, 教育実習を長くして教員の完成教育を大学で行うという考え方への批判(現場での体験を通して教員として完成されて行くのだという考え)を支持する結果と言えるかも知れない。

重要度の変化で男女差の大きい家庭・音楽・図工についてみると, これら3教科とも3年次の調査では, 男子がかなり低く評価していた教科である。これらが男子によって, 卒業後に高く評価されたことにより, 男子の重要度変化が女子に比べて大きくなり男女差が出現したと考えられる。このことは, 教科の重要度評価の男女差が小さくなったことを意味する。音楽と図工については, 教え易さについても男子がかなり変化し, 比較的教え易いと回答する傾向になっている。

一方, 好みについては, プラスに変化した教科がやや多いものの, マイナスに変化したものもかなりある。また, 男女差が大きく, 男女とも同じように変化した教科は, 1つもなかった。

3. 教員1年生の8教科に関する意識

次に, 教える能力, 教え易さ, 教えるのが好きか, 学ぶのが好きか, そして, 教科としての重要度について, 回答者全員の平均値と教科間順位を表4に示した。この表を概観すると, 男子は, 女子と比較して, 教科として理科と体育を好み, 国語と音楽を嫌っていることがわかる。しかし, 好みの平均点はすべて3以下であり, 平均すると全教科とも普通以上に好まれていることになる。この男女差は教えることの意識に反映

表4 各教科に関する意識（5段階評価の平均値の教科間の順位）

質問項目	国語	算数	理科	社会	家庭	音楽	図画工作	体育	備考
教える能力	3.28(4) 3.37(4)	2.52(2) 3.03(2)	2.92(3) 3.60(6)	3.28(4) 3.60(6)	3.46(7) 2.80(1)	3.92(8) 3.27(3)	3.29(6) 3.64(8)	2.40(1) 3.48(5)	1…良い 5…劣る
教え易さ	3.16(8) 3.03(8)	2.40(2) 2.37(2)	2.80(6) 2.60(5)	2.84(7) 2.63(6)	2.46(3) 2.06(1)	2.68(5) 2.40(3)	2.56(4) 2.69(7)	2.20(1) 2.52(4)	1…易しい 5…難しい
教えるのが好き	2.84(6) 3.00(7)	1.56(1) 2.17(1)	2.04(3) 2.67(4)	2.44(4) 3.07(8)	2.97(7) 2.59(2)	3.00(8) 2.73(5)	2.80(5) 2.79(6)	1.72(2) 2.62(3)	1…好き 5…嫌い
学ぶのが好き	2.46(5) 1.90(1)	1.92(2) 1.97(2)	1.96(3) 2.55(7)	2.42(4) 2.55(7)	2.83(8) 2.41(6)	2.71(7) 2.24(4)	2.63(6) 2.35(5)	1.67(1) 2.21(3)	1…好き 5…嫌い
重要度	1.20(2) 1.10(1)	1.12(1) 1.10(1)	1.84(6) 2.00(7)	1.80(5) 1.97(5)	2.05(8) 2.00(7)	1.60(4) 1.83(4)	1.96(7) 1.97(5)	1.32(3) 1.43(3)	1…重要 5…あまり重要でない

注：上段が男子，下段が女子

していて、理科と体育は、女子の方が、教えることを好まず、教える能力も低く回答している。一方、男子の好みの評価の低い音楽は、男子の方が教える能力を比較的 low 自己評価し、教えるのが好きでないと回答している。しかし、教え易さの意識は好みの男女差とはあまり関係なく、男女とも国語が難しく算数は易しいと思っている。しいて男女差をみると、女子は音楽を男子は体育を教え易いと感じているようである。3年次の調査では、教え易さの回答で、女子は体育を3番目に易しいとして男子より易しく感じているという結果であったが、今回は4番目であり、男子より0.3ポイント低かった。体育は、女子の方が難しいとしているという調査もあり、問題の残る結果である。

国語については、教科としての好みに男女差があるものの、教えることの意識にはほとんど男女差が認められなかった。また、理科は男子の方が好きなのをたいして、同じいわゆる理科系である算数については好みに男女差がみられなかった。一方、算数の教える能力と教えることの好みについては、8教科内の順位は男女とも同じ順位であったが、平均値では0.5ポイント以上も差があり、一般に言われている女子文科系、男子理科系が得意、という傾向がここでもあらわれた。しかし、教え易さについては、平均値でもあまり男女差がなく、この解釈は難しい。能力がなくとも、夢中で教えようと努力していると教えるのが難しいとはたいして意識しないのかも知れない。

4. 音楽・図工・体育の実技の授業についての意識

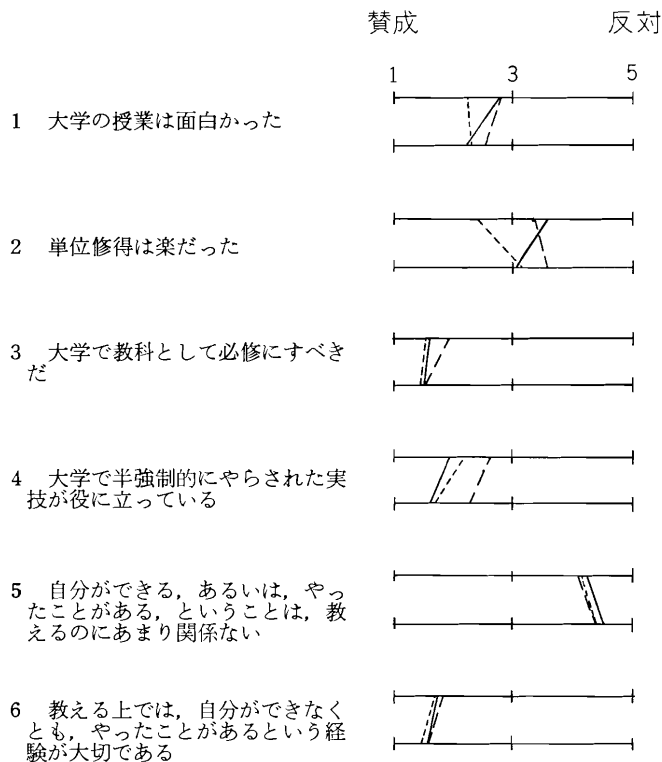
実技3教科の各々について、図2に示した6つの観点から5段階評価で意見を聴取した。3教科とも実技の経験が教える上で大切という点ではほぼ同じ評価をえている(No.5と6)。しかし、大学での実技科目が教える上で役立ったかについてみると(No.4)図工の実技の評価がやや低くなり、男女別では、女子の方が全体的にやや高く評価していることがわかる。必修にすべきかどうかについては、男子だけが、役立ったかどうかの回答に連動して図工が相対的にやや低い評価であり、女子では、3教科に差がない(No.3)。

実際の授業についての感想は男女で差があり、男子は、体育を面白くて楽であったと答え、女子は、図工を難しく面白くなかったと答える傾向があった(No.1と2)。

5. 教育学部の授業のあり方についての意識

教員養成問題について、全国私立大学教職課程研究連絡協議会のメンバーによる日本教育学部大学協会の立場に対する批判の第一点は、教員養成系の大学・学部が大学としての研究教育機能を捨てて、文部省のいいなりになって単なる教員養成機関になりさがることを是認している⁽⁴⁾、とするものである。そこで、教育学部の授業のあり方について、(1)教員養成優先か学問伝授優先か、(2)授業内容は一般教養重視か教育技術重視か、について、二者択一的に4段階評価でたずねたところ(表5)、(1)については、教員養成を念頭においた授業を支持する者が多く、特に女子で顕著であった。しかし、教養主義か、教育技術重視かについては、男女とも賛否半々であった。

次に、教科専門科目と教職専門科目のうちの教材研究について、一般論としての意見をたずねたところ



—— 音楽 - - - - - 図工 ······ 体育

図2 実技3教科についての意識(5段階評価平均値)

注:上段が男子,下段が女子

表5 教育学部の授業のあり方についての回答分布(単位:人)

意見①	左	やや左	やや右	右	意見②
教員養成学部であるから,教員養成を念頭においた授業を行うべきである。	8	9	6	2	教育学部も大学の学部だから,各科目に関連する学問分野の知識を十分に与える授業がよい。
	9	13	7	0	
小学校で教える技術は,本質的には経験をつみながら個々の教員が体得するものであるから,教育学部では,その時に大局的見地に立てるような全般的教養としての知識が与えられるべきである。	4	8	7	6	教育学部では,小学校教員として必要な知識や技術を多く与え,即戦力となる教師を養成することを主眼としたカリキュラムを作るべきだ。
	3	11	13	0	

注1:上段が男子,下段が女子

注2:回答要求の方法「教育学部の授業のあり方について,下の左右に示した2つの考え方があり,どちらも正論です。あなたは,しいて選ぶとすると,どちらの考え方に賛成しますか」

(図3),各教科の授業内容は,小学校で教える内容に関連するべきであると考えているようである。しかし,大学で教えられたことが役立っているかに関しては,必ずしも肯定的というわけではない。女子の方が男子よりやや肯定的ではあるが。

教材研究については,基本的な考え方よりも具体例を多く持ち込んだ授業を歓迎しているようであり,このあたりが,教科教育学が学問たりうるかということとも関連して,問題となろう。これらの項目の回答傾向の男女差はほとんどなかったが,全般的にみて,女子のほうがやや技術優先であり授業を役立っていると

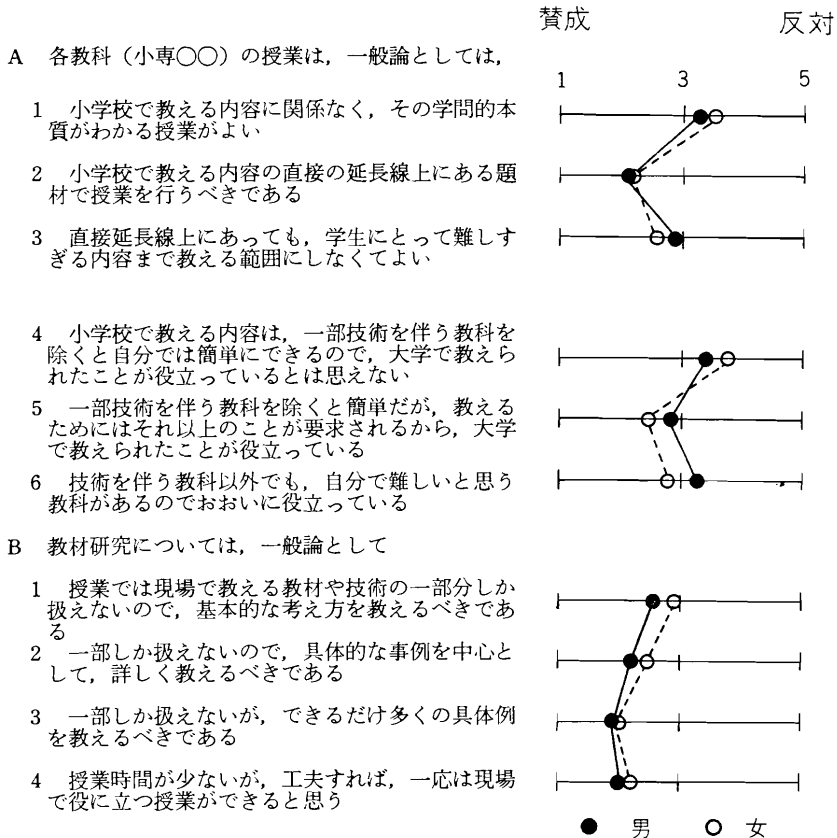


図3 教科専門科目と教材研究についての意識 (5段階評価平均値)

考える傾向にあるといえる。

別の項目で総括的に大学での授業が役立っているかどうかについて5段階評価でたずねたところ、平均値が男子3.00、女子2.81であり、賛否半々であったが、やはり、女子がやや肯定的であった。

これと関連して、大学における教科専門科目と教材研究の授業が役立っているかについて8教科各々にわけて5段階評価でたずねたところ (表6)、教科専門の授業で、3.0 (どちらともいえない) よりも平均値が

表6 各教科の教科専門科目と教材研究についての意識 (5段階評価の平均値と教科間順位)

質問項目	国語	算数	理科	社会	家庭	音楽	図画工作	体育	備考	
教科専門科目	役立ったか	3.74(7)	3.83(8)	3.25(5)	3.52(6)	3.00(4)	2.35(1)	2.96(3)	2.44(2)	1...役立っている 5...役立っていない
	増やすべきか	2.57(4)	2.52(3)	2.58(5)	2.65(7)	2.62(6)	2.35(1)	2.78(8)	2.48(2)	1...多くすべき 5...少なくすべき
教材研究	役立ったか	3.36(7)	3.32(6)	2.80(4)	3.40(8)	2.79(3)	2.48(1)	2.83(5)	2.64(2)	1...役立っている 5...役立っていない
	増やすべきか	2.04(3)	1.95(1)	2.04(3)	2.00(2)	2.19(8)	2.08(5)	2.08(5)	2.13(7)	1...多くすべき 5...少なくすべき

注：上段が男子、下段が女子

低かった（肯定的）教科は男女の実技3教科のみであった。教材研究についてみると、役立ったかどうかについて3.0以下であった教科は男女の実技3教科のほかに、男子の理科と家庭であった。一方、教科専門科目の授業を増やすべきだという意見に対しては、どの教科も3.0よりは低かったが、男子の音楽と体育を除くとその値はすべて2.5以上であった。教材研究の授業については平均値でみると、男子の家庭の2.19が最高であり、全体的にみて多くすべきであると考えていることが分かる。

役立ったかについて、一応、平均値2.5以上を賛成の目安として全体をみると、大学の教科専門科目が役立っていると考えている教科は、音楽と体育のみであり、国語と算数の教科専門科目は役立っているとほとんど評価されていないことになる。教材研究についても、役立っていると積極的に評価していると考えられる教科は音楽と体育だけであり、図2の設問4の回答傾向と一致する。

一方、授業時間を増やすべきかどうかについては、教科専門科目については、男子の音楽・体育のみが2.5以下であった。また、算数については2.52とかなり時間の要求が強いが、これは、役立っているかについての評価が3.83と低かったことと考えあわせると、もう少し数学の本質がわかったほうが算数の授業に役立つと考えているためであろうか。教材研究については、全教科についてもっと授業時間を増やしてほしいと思っており、その内容は前の項目にあるように、具体的な教材の扱い方ということになるのであろう。

これと関連して、教える上で必要な知識のレベルについて、中学校程度、高等学校程度、大学教養程度、大学専門程度という尺度で回答させたところ、表7にあるような回答を得た。この表を見ると、大学専門程

表7 各教科を教える上で必要な知識水準に関する回答分布（単位：人）

教科	中学程度	高校程度	教養程度	専門程度	その他
国語	2	7	4	7	1
	1	8	8	8	4
算数	5	7	5	6	2
	3	15	5	4	4
理科	2	10	3	8	2
	2	12	8	4	5
社会	1	8	8	6	2
	3	10	7	3	8
家庭	3	3	5	4	3
	3	11	4	5	4
音楽	2	3	4	9	6
	2	7	4	9	9
図工	2	2	3	11	7
	2	5	5	9	9
体育	2	4	3	11	5
	2	4	5	10	10

注：上段が男子，下段が女子

度の知識が必要と答えた学生がもっとも多い教科は、実技3教科を除くと国語のみであった。そのうち、国語については、高等学校程度で十分と答えた者も同数いた。このような意識が大学で教科専門科目よりも教材研究を増やすべきだという回答傾向につながると思われる。ただし、それが正しい主張かどうかは問題の残るところである。家庭は、女子に高等学校程度という回答が多かったが、これは、高校で女子のみ家庭科が必修であったことによるのであろう。そうすると、裁縫や料理の実習があるものの、家庭は教えるという立場からは国語等の4教科に近い教科としてとらえられているということになる。

実技教科については、大学専門程度の知識が必要と答える者が多かったが、これは、実技教科の場合、大学の授業内容が必ずしも高校で教える内容の延長線上にあるもののみではないことによると思われる。

この設問で用いた尺度は一応は順位尺度と考えられるが、回答者がどのようなイメージで回答したかは問題である。例えば、大学教養程度の音楽などというものは存在しないにもかかわらず、男女とも4名が大学教養程度と回答している。おそらく、小学校課程の音楽の授業の一部を1年生の時に受講しているためと思われる。この設問に対しては上述した分類で表現できない場合は、「その他」として、その教科にふさわしい表現を記述するように求めたところ、実技3教科と女子の社会にその他と答えた者が多かった。その他と答えた者の中で、その必要知識レベルを表現する文章を書いた回答は少なかった。全教科について、その他と答えた者の中には、知識レベル以外に教え方や教え方を工夫するための柔軟な頭脳と答えた者も何人かいた。実技3教科については、技術を身につけることや、指導法の習得をあげる者が多かったが、社会については内外情勢や地域の情報といった雑学的内容を答えた者が3名いた。このうち1名は、はっきりと、「雑学」と表現していた。

6. 体育の授業についての意見

次に、体育の授業に関した項目の結果を報告する。

小学専門体育実技は、現在、体操・器械運動、サッカー、バスケットボール、ダンスとスキー・水泳の集中授業で2単位を与えている。この授業形態については、教官の間でも1種目の時間数が少なくても一つものにならないという意見がある。そこで、この小学専門体育実技のあり方についてたずねたところ、圧倒的多数が現在の方法、つまり、なるべく多くの種目を経験させるのがよい、という意見であった(男子76%、女子88%)。1種目の時間数を増やし、得意種目を作るようにすべきだという意見には賛成がほとんど得られなかった。

また、体育に関して、もっと熱心に学んでおけばよかったこと、および、大学で教えられなかったことで、学ぶ機会があったらよかったと思うことを自由記述させたところ、様々な回答が得られた。両設問への回答は混乱しており、実際はある程度教えた内容を教わらなかったとして回答してきたりもしている。両者をまとめて考察すると、学習不足であったとするものでは、実技の具体的な種目をあげてもっと練習しておけばよかったとする回答がもっとも多かった。一方、教えてほしい希望事項でも、自分の学校で盛んであるという理由でスケート(5名)や縄とび(1名)のように具体的な種目を挙げる者もいた。本来、小学校で行われているすべての運動種目を教授することなど不可能である。したがって、それを補う意味でも、体育学あるいは運動指導の原理のようなものが必要なのであるが、それに関しては、子供の心理的、身体的特性に関する授業(6名)や教材研究をもっと学ぶべきであったという回答があった。運動種目以外で教えてほしかったと思っていることは、救急法を含む保健分野(9名)、集団行動(9名)、準備運動(4名)、全般的な運動の指導法(4名)等であった。これらは、概して直接授業展開に役立つノウハウであり、この内容がどの本を見たらわかるのかといったことがわかるような体育学全体の理論的学習の深化を問題とする回答は少なかった。これは、一つには、小学校課程の学生が受講する教材研究や実技科目も含めて8単位にしかならない授業では、体育学全体を視野におさめることが難しいためと考えられる。また、もう一つには、調査対象が現場で指導の苦勞を体験しはじめたばかりの教員1年生であり、設問自体が具体的分野を回答するように指示したためとも考えられる。

7. 教員養成に関する意見

教員免許基準引き上げのための法律改正案が国会に提出されているという最近の動向にあわせて、教員養成に関する意見をたずねた結果を図4に示した。これによると、開放性の教員養成は一応支持されており(No.2)、一般論として、単位を増やしたからといって良い先生が育つとは考えていない(No.3-5)、という結果であった。

しかしながら、教育実習、教職専門、教科専門に分けてたずねると(No.8, 10, 11)、教育実習増には賛成するものの、他の設問はどちらともいえないに近い意見となった。これは、もし本当に意味ある授業であれば増やしてほしいという期待感が含まれた回答になるためではないかと思われる。教育実習に関して条件を付けると(No.6, 7)回答において実習賛成の傾向がやや弱まった。これは、1年目に学年担任をさせない、あるいは、2年目からは慣れるので、といった付帯条件にある程度は共感する部分があることを示している。

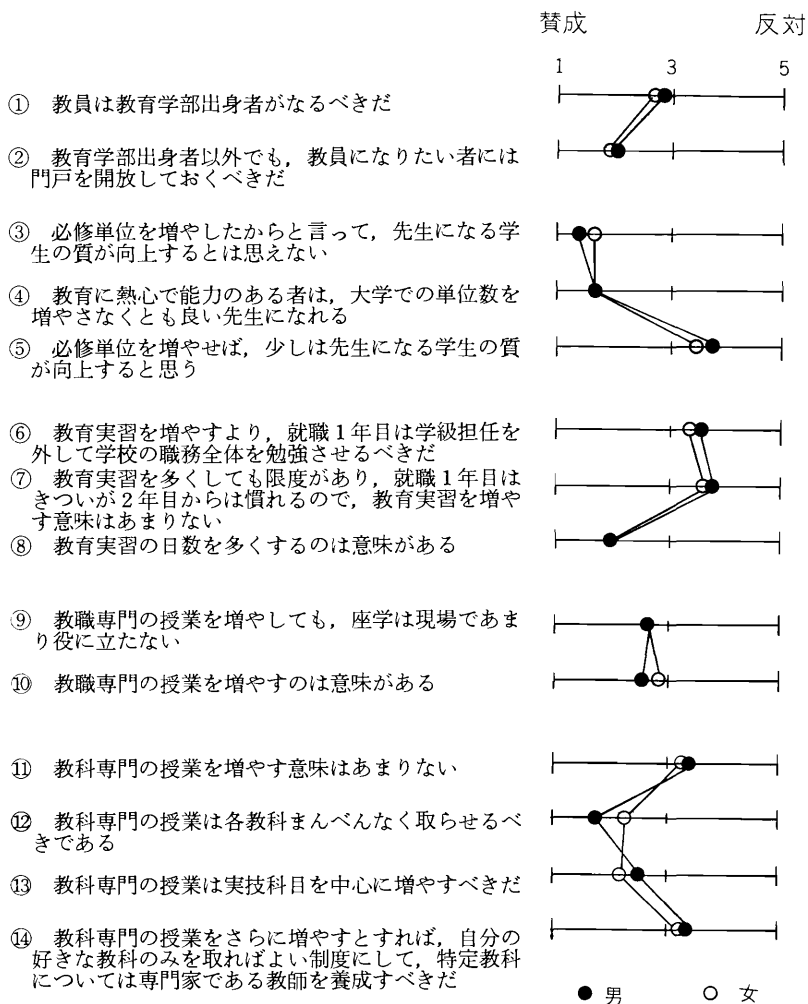


図4 教員養成に関する意見に対する回答（5段階評価平均値）

教職専門と教科専門について否定的な意見を述べたNo.9とNo.12をみると、教職専門を増やすことの方が教科専門を増やすことより否定的にとらえられている。これは、教職専門の一部である教材研究の方が教科専門よりも重視されていた前述の傾向と矛盾する。おそらく、教職専門と言われたとき、彼らが教育心理や教育原理を連想し、教材研究は教科専門とひとまとめにして考えたためと思われる。

教科専門については、各教科まんべんなく（No.12）実技科目を多く（No.13）履修すべきだと考えており、日本教育大学協会が押し進めようとしているいわゆるピーク制³⁾については積極的な賛成が得られていない（No.14）。

いずれにしても、5章およびこの章の結果からは現在の教育学部あるいは一般的に大学における授業は、教職に就いた場合に役立つ（立派な先生になるため、という意味も含めて）と積極的に支持されていない。しかし、教育実習はある程度増やしてもよく、また、授業を工夫して増やすことにより教員養成に寄与できると期待されているとみてよいであろう。

8. 教育現場での感想

最後に、教育現場へ出たの感想を自由記述させた項目について述べる。これは、学生時代に持っていた教員のイメージと現場体験とのギャップ、および、大学時代に学んでおけばよかったと思っていることで体育に関係なく、一般的なことについて回答させたものである。

前者については、教室で子供を教える以外に様々な仕事があることへの驚きと戸惑いの回答が多く、多忙をあげる者28名、職場での人間関係（父兄、地域との関係を含む）11名、学級経営6名であった。一方、子供の扱い方に悩んだり戸惑っているとする者は6名であった。学級経営と答えた者の中にも、子供の取り扱いで戸惑っている者もいると思われるが、とにかく、教員に雑用が多いという感想が過半数であり、次に人間関係を問題とする回答が多かったことが目をひく。教員を取り巻く環境変化については様々なことがいわれているが、先生が忙しいということが新任の教員についてもいえるわけであり、教員の雑務からの開放は必要な検討課題ではないかと思われる。なぜなら、新任教員の発言は、ベテランで有能な教員が忙しいと発言する場合と全く異なり、学校組織全体がかかえている構造的な問題²⁾と考えられるからである。

後者については、抽象的な一般教養的な勉学不足（教育観の確立、1つの学問を深める等）に対する反省、一般教育技術の学習不足（教材研究をしっかりとすべきだった、教育技術の本をもっと読むべきだった等）、具体的技術の習得不足（ピアノをもっと練習すべきであった、体育実技をしっかりとやるべきであった等）、およびその他に分けて男女別に集計したところ、表8のようになった。この表を見ると、他の項目に対する回

表8 大学時代に学んでおけばよかったことについての回答分布（単位：人）

	男子	女子
一般教養的勉学不足	3	13
一般的教育技術の学習不足	8	4
具体的技術の習得不足	5	10
その他	3	8

答傾向からは、大学で一般教養よりも教育技術の伝授をより望んでいると考えられた女子の方が、一般教養の力不足を痛感していることがわかる。また、教育技術に関しては、男子が一般的教育技術の不足を多く感じているに対して、女子では個々の技術不足をうったえる傾向にある。これは、教えるのが難しいと感じた時、その原因を男子は教育技術の不足と考えるのに対して女子では自罰的に自分がそのわざをできないからだ、と考える傾向が強いためだとも考えられる。

引用文献

1. 麓 信義・小山秀哉「小学校教員養成課程学生の意識調査——体育科の実技授業を中心として——」弘前大学教育学部紀要, 50, 45—60, 1983.
2. 鎌田 慧「教育工場の子どもたち」岩波書店, 1984.
3. 教大協教員養成制度委員会「教員養成制度に関する調査中間報告」日本教育大学協会会報, 46, 35—114, 1983 (p.79).
4. 右島洋介・白井 慎「教員養成政策とその批判」右島洋介・鈴木慎一編著, 教師教育——課題と展望, pp.53—112, 勁草書房, 1984.
5. 岡本洋三「教育系大学・学部目的・性格——教育学部論」小林哲也編, 教員養成を考える, pp.71—88, 勁草書房, 1982.
6. 矢野久英「子どもを動かすことの苦手な女教師への助言」体育科教育, 20—7, 48—49, 1972.